68 期リレーエッセイ

吾輩は人間である。

会員　荘加 大策

1　人工知能の発達

昨今，今までにも増して，人工知能やロボットというものを至るところで目にする。

古くは工業の機械化により，効率的な生産が可能となり，人間が機械に取って代わられたなどという話は小学校の教科書にも書いてあることだが，最近では自動車が自動運転を始めたり，ロボットが受付をやっていたりする。囲碁や将棋でも，人間がコンピューターに敗北する時代だ。先日テレビで見かけたのだが，人工知能が歴史上の有名な画家の絵を学習し，その画家の画風で絵を描いたりできるそうだ。今や，こうした人工知能は，芸術の分野にも進出するほどの拡大をみせている。

2　忘れられない言葉

さて，いきなり何の話かと思われた方もいると思うが，私は別に「人工知能の展望とその危険」などと題した論文を書きたいわけではない。私が，こうした前置きを書かせてもらったのは，修習時代の忘れられない言葉があるからである。それは，教官が仰っていた，「法曹という仕事は，ロボットやコンピューターではできない仕事だ。そういったものに取って代わられることのない人間にしかできない仕事。だから，やりがいも楽しさも，責任もある。そのことに誇りを持って頑張って欲しい」といった言葉である。

こういった視点から法曹という職業を見たことがなかった私は，強く感銘を受けた。

3　法曹の仕事

依頼者との相談という仕事のスタート地点のみを例にとってもこれは明らかであろう。まず，依頼者のところに「足」を運ぶ必要がある場合もある。そして，依頼者の話を「耳」で聞き，資料等を「目」で見て，必要な質問や指示や助言を「口」にする。こういった作業は，もしかしたら技術の進歩によっては人工知能等でもこなすことができなくはないかもしれない。しかし，事情は千差万別であるから，過去の類似事件のデータベースを持っていたとしても，本件において適切な情報収集や判断・助言ができるとは限らない。それに，相談というものは単に作業として行えばよいというものではない。人間が相手なのだ。依頼者の感情的な部分を感じ取る必要もあるし，不安等で混乱している依頼者を安心させたりするために，堂々とした態度をとったり笑顔を見せたりする必要がある場合もあるだろう。時には信頼関係を深めるため，一緒に食事をしたり，雑談をしたり冗談を言うことだって必要だ。この全てをロボットができるだろうか。

そして，当然，このあとの方針の決定や，和解交渉や訴訟業務はもっと複雑なものなのであり，臨機応変な判断を求められる場面が多くあることから，人間にしかできない仕事であることは明らかであろう。

4　法曹としての勉強＝人間生活

私の勤務する事務所のボスがこんなことを教えて下さった。「全てのことが弁護士としての勉強。知って無駄なことなんて一つもない」と。私は全くそのとおりであると思った。弁護士はこの世に存在するありとあらゆるジャンルの事件や人間を相手にすることになる。そのときに，少しでもその分野のことを知っていれば，依頼者の信頼を得やすいし，効率よく話も進められるというものである。また，知ったことの全てが経験則となり，合理的で的確な判断・主張が可能となる。

このように，心を持ち，人間としての生活の中にしかないものを感じ学び取ることのできる人間こそが法曹として必要な勉強もできるのである。

5　吾輩は…

以上のように，法曹として必要な勉強と法曹がすべき仕事は，まさに人間が人間として人間の心を持って生きているからこそできるものであるといえる。これは決して，打ち込みのデータと演算で真似できるものではない。

吾輩は人間である。名前はまだ（売れて）ない…。

だがしかし，私は誇りを持ってこの仕事をしていきたいと考えている。